

所 陵

No. 56

[SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



エジプト神像Figurine of the Egyptian God (古代エジプト)

● 目 次 ●

沖縄県立博物館・美術館の開館・・・・・・・・・・・・・・・・	米田 文孝	2
関西大学簡文館の「文化財登録原簿」への登録について・・・・・・・・		5
ドイツ博物館訪問記・・・・・・・・・・・・・・・・	熊 博毅	6
金属製品の保存処理・・・・・・・・・・・・・・・・	千葉 太朗	8
本山彦一氏のアルバムとペルー共和国パラモンガ遺跡・・	山口 卓也・浅見 恵理	10
関西大学博物館の新たな取り組み・・・・・・・・・・・・・・・・	石立弥生子	12

関西大学博物館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

Tel. 06-6368-1171 (直通) Fax. 06-6388-9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/museum.htm>

沖縄県立博物館・美術館の開館

米 田 文 孝

2007年11月1日、那覇市の新都心として発展が著しい「おもろまち」に美術館との複合施設として、待望の沖縄県立博物館・美術館が開館した。首里城公園の北側、宮殿全景を仰ぎ見ることができる地点として著名な龍潭池北岸に面していた旧沖縄県立博物館と比較すると、白亜のグスクを想像させる堂々たる外観や延床面積が約23,700㎡であることをはじめ、あらゆる面で隔世の感がする。



復元された首里城

まず、沖縄県立博物館・美術館の歩みを概観しておこう。1936年7月、首里城北殿内に沖縄県教育会附設郷土博物館が開設されたが、1945年3月～5月の沖縄戦により全焼した。第2次世界大戦の終結後、米国海軍軍政府と首里市により残欠文化財が収集され、それぞれ沖縄陳列館（1945年8月開設）と首里市立郷土博物館（1946年3月開設）に収蔵された。その後、紆余曲折があったが両館は統合され、1953年5月、首里当蔵町に本館と別館としてペリー来琉100周年を記念したペリ記念館が落成し、沖縄民政府立首里博物館として開館した。このとき、「おもろさうし（尚家本・重要文化財）」などが返還された。

1955年4月には琉球政府立博物館と改称され、1965年10月、米国の援助により首里大町の尚家跡地に新館が落成し、11月3日に開館した。さらに、沖縄返還・日本復帰にともない1972年5月に沖縄県立博物館と改称され、



沖縄県立博物館入口の銘板

翌73年には国庫補助により2階部分（民俗室・陶器展示室・美術工芸室）が増築された。以降、2005年3月に閉館されるまで約40年に及んで沖縄県を代表する博物館として運営され、県内外の人びとに永く親しまれてきた。

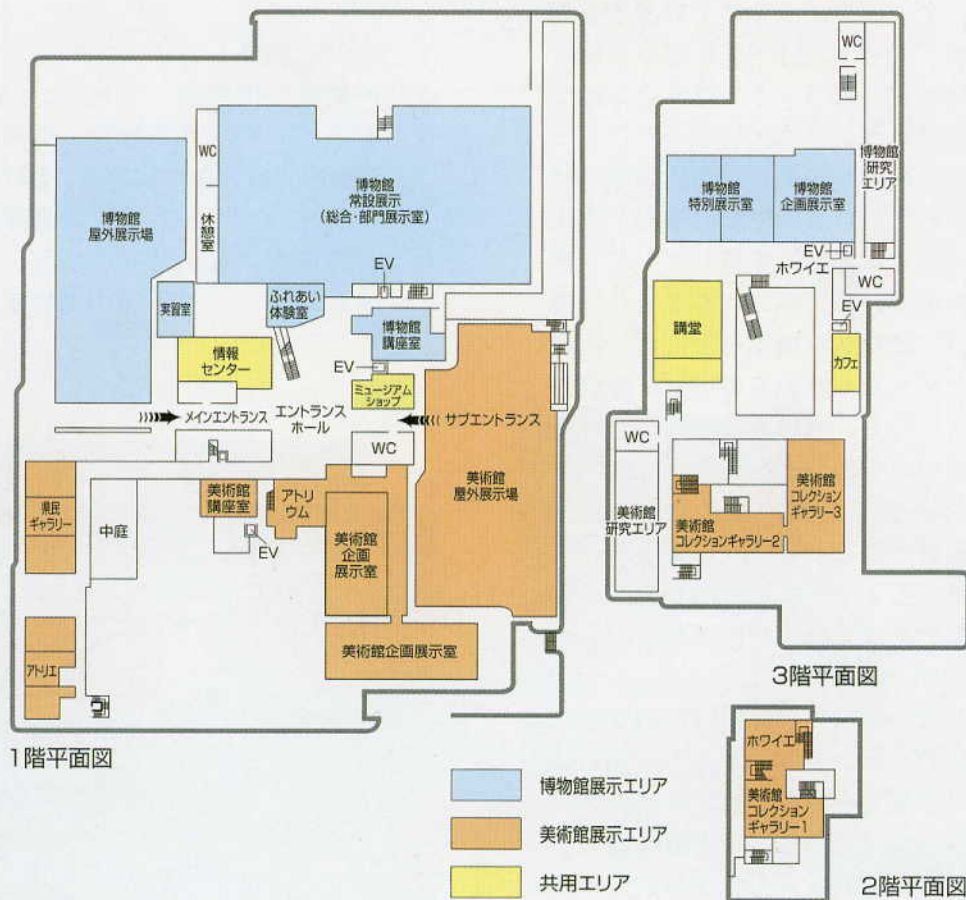
この間、収蔵品が8万点を超え収蔵庫が飽和状態を迎えるとともに、今日的な博物館活動を展開するためには展示面積をはじめ施設面での制限が生じるようになった。さらに厳しい気候風土から建物の老朽化が進行した結果、1990年7月にこれらの抜本的解決を図る目的で沖縄県立博物館新館建設委員会が設置され、翌1991年3月には基本構想が策定された。しかし、県財政の逼迫から1997年度に事業は一時凍結され停滞したが、2002年度に沖縄復帰30周年記念事業として再開された。2006年11月には新博物館・美術館施設が竣工し、旧館からの収蔵品の移転作業や展示工事などが急がれた。

さて、沖縄県には日本最南端にある博物館として知られる石垣市立八重山博物館や、沖縄国際海洋博覧会の海洋生物園を前身とする沖縄美ら海水族館をはじめ、特色ある施設が数多く運営されているが、本館は沖縄県の国際性に富んだ歴史的背景と特性を体系的・集約的に展示するはじめての本格的施設である。ここでは筆者の関心から博物館、特に考古・歴史部門を中心に紹介を進めたい。

筆者が訪れた晩秋の一日は、同博物館・美術



沖縄県立博物館・美術館全景（西側から）



沖縄県立博物館・美術館平面図（引用参考文献1より、一部改変）

館の開館間もない時期ということもあり、その開館を一日千秋の思いで待ち望んでいた人びとや観光客、修学旅行生などの観覧者であふれていた。指定管理者制度のもと、入館者数が博物館経営の指標として重視される昨今、沖縄県・新都心にある大型施設という好条件や、大型バスのアクセスに対する施設整備など行き届いた配慮などから、開館第二年度目以降の急激な入館者数の減少に悩む多くの博物館と比較して恵まれた環境にある。

博物館1階の常設展示（総合・部門展示室）は「海と島に生きる～豊かさ、美しさ、平和を求めて～」をメインテーマに、地理的に海洋性と島嶼性をあわせもつ自然のなかで育まれてきた沖縄県の歴史・文化を人類史・自然史の脈絡において位置づけるとともに、海と島に生きる人びとの姿とその普遍性を追求している。3階には博物館特別展示室・企画展示室があり、新館開館記念展として「人類の旅―港川人の来た道―」が開催され、港川人（第1～4号標本）が一括して展示された。標本を分散させることにより災害等による消失の危険性を軽減する観点などから今後、港川人第1・2号標本は東京大学総合研究博物館、第3・4号標本は本館で分担管理されるという。

総合・部門展示室の先史時代から古琉球時代の考古資料を中心とした展示では、遺跡と出土遺物をバランスよく体系的に配置している。標式的なグスクの模型展示にみられるように、遺跡・遺構については精巧な模型とともに、視覚効果を考慮したパネルや解説を併用して総合的な理解が図られている。近世沖縄から現代沖縄については文献史料や絵画資料が多用され、精緻な工芸品・写真資料などの展示とも相俟って、多角的な理解が得られるように考慮されている。これらは開館までの限られた期間内で重ねられた、学芸員をはじめとした関係者の不断の努力の賜とできよう。

ただし、欲を言えば限りがないが、観覧者の動線や展示に対する反応を観察すると、例えば副読本で琉球・沖縄史を学んでいたりする県内の高等学校生徒に対し、基本的に教科書にあるきわめて限定された知識しかもたない県外の高
等学校生徒とは、その理解度に大きな差異があるのではないかと思う。動機は何であれ入館者

に少しでも理解を深めてもらう目的から、学芸員はもとより博物館友の会会員をはじめとした連携・支援スタッフも含めた、さらなる工夫・努力が必要かもしれない。

最後に、特別展・各種イベントの開催や情報センター、ふれあい体験室、博物館実習室などの運用は今後、沖縄県立博物館時代に蓄積された豊富な経験・資産を基礎にして本格化するであろうが、設置条例などに謳われた本館の理念・目標に対する姿勢と真価が問われる重要な課題となろう。なお、同博物館の展示や活動については、「イベントカレンダー」や「よくある質問」をはじめ、工夫が凝らされたHP (<http://www.museums.pref.okinawa.jp>) に詳しい。

今後、琉球王国がみずから「万国津梁（世界の架け橋）」と称えたように、本館は沖縄県の特色ある歴史や自然、美術などを国内外に発信するとともに、教育・文化の発展に貢献する調査研究の新拠点として、さらなる躍動が期待される。

【引用参考文献】

1. 沖縄県立博物館・美術館、2007、『博物館展示ガイド』、同博物館・美術館。
2. 沖縄県立博物館・美術館、2007、『人類の旅―港川人の来た道―』、同博物館・美術館。
3. 石垣市立八重山博物館編著、2006、『博物館あんない』、同八重山博物館。



沖縄県立博物館・美術館 エントランスホール

関西大学簡文館の「文化財登録原簿」への登録について

関西大学簡文館が「登録有形文化財（建造物）」の1つとして選定され、このたび、平成19年7月31日付けをもって、登録番号第27-0426号として文化財登録原簿に登録され、8月13日付け官報号外第181号で告示されました。簡文館の入り口には、登録証のプレートが設置されました。関西大学千里山キャンパスの現存する最古の建物として、銘記されるべき登録です。

登録文化財として指定される条件としては、建築後50年を経過した建築物で、広く親しまれ、そこでしか見られない珍しい形などを有していることがその条件となっています。

「関西大学簡文館」は、大学図書館建築として代表的なものの1つであり、昭和42（1967）年に文化勲章を受章した建築家村野藤吾氏の作品の1つであることなどから選定されました。

今回指定を受けた関西大学簡文館は、一番古い部分が今から80年前の昭和3（1928）年に図書館として建築された建物です。関西大学創立70周年記念事業の一環として大きな増築工事が昭和30（1955）年に行われ、建築家・村野藤吾氏が増築部分の設計を行っています。このとき増築された円形建物部分は、戦後の急激な学生増に伴って開架閲覧室として設置され、以後、学生や教職員の教育・研究の中心的役割を果たしました。

昭和60（1985）年に総合図書館が完成したことに伴い、図書館が移転し、そのあとは研究所となり、「簡文館」という名称が附されます。その後、平成6（1994）年に関西大学博物館が開設され、「関西大学簡文館」の新たな活用が始まりました。平成18（2006）年10月に年史資料展示室が設置され、現在は博物館と相まって関西大学の文化ゾーンを形成しています。

村野藤吾氏の作品の特徴は、円形建築や曲線を使用したものが多い点で、増築部分の円形建物が代表例です。その中心には、螺旋階段が残っており、その手すりは村野作品らしい非常に優雅な曲線を描きます。村野氏は昭和20年代から30年代にかけて関西大学の建物をいくつも設計し、いくつかは改築で失われましたが、「簡文館」、関西大学シンフォニーホールとなった「特別講堂」、ITセンター「円神館」などが千里山キャンパス内に今も残っています。

（博物館事務室）



ドイツ博物館訪問記

熊 博 毅

平成19年夏、私は学校法人関西大学から「欧米の高等教育事情視察研修」ということでベルギー、フランス、スイス、オーストリア、ドイツの5カ国を2週間にわたって訪問する機会を得た。各国では、それぞれの国を代表する大学を訪ね、意見交換の機会を持ったりしたが、それに加えて、世界遺産をはじめとする文化遺産や博物館を見学する幸運にも恵まれた。

ドイツ博物館へは8月8日に訪れたが、訪独前から私は、世界有数の技術大国の象徴ともいえるドイツ博物館には、ぜひとも足を運びたいと思っていた。それが今回実現した。

ドイツ博物館の誕生

ドイツ博物館の提唱者はオスカー・フォン・ミラーである。彼がこの博物館の建設をスタートさせた1906年、ドイツは科学技術の面でそれまで遅れをとっていたイギリスやフランスにようやく追いつき、さらには追い越したところであった。フォン・ミラーは、満々たる自信に満ち、「科学と技術を万人のものに」と宣言して時代を先んじたと言われている。ただ、博物館の建設は第1次世界大戦のために遅れ、1925年に開館した。



ドイツ博物館の外観

ドイツ博物館の年間入場者は130万人を超えており、ドイツで最も人気のある博物館の1つである。ミュンヘンの中心部であるマリエン・プラッツの東南東に位置し、イザール川の中洲

に建っているネオ・バロック様式の建物（ガブリエル・フォン・ザイドル設計）は、今もなお重厚な雰囲気漂わせている。

ドイツ博物館の特徴は、その規模の巨大さ（本館だけで約5万㎡）、収蔵品の豊富さ、整理技術の高さに加え、一般の人にも理解しやすいように工夫された展示方法のすばらしさにある。それまでの博物館では、展示品はケースの中や棚の向こうに置かれ、来館者は静かに眺めるだけであった。それを根本的に変更し、来館者が実験装置や機械を操作したり、学芸員がデモンストレーションしたりする動的な展示方法を導入したのである。この体験型展示はその後、世界中の科学技術博物館に強い影響を与え、広く普及したが、いかにもドイツらしい、革命的な発想であった。

私が訪れたときも、父親に抱きかかえられながら子どもたちが顕微鏡をのぞき込んだり、オープン リサーチ ラボラトリーで、たくさんの来館者を前に学芸員が科学の実験を実演したり、子どもたちがフライトシミュレーターで飛行機を操縦したりしていたが、そのときのみんなの興味津々とした表情は今も印象に残っている。



フライトシミュレーターを操作する来館者

目を引く展示品

人類の技術は陸・海・空の各分野で進歩してきたため、ドイツ博物館の展示品も多岐に及んでおり、この博物館では、それらの品々をいく

つかのコーナーに分けて展示している。なかでも迫力があるのは航空機で、展示にかなりの面積を割いている。特に「ユンカース Ju52/3m」の巨大さは、ひときわ目を引く。

機首に1発、両翼に1発ずつ、あわせて3発のエンジンを有するこの飛行機は1932年以来、5000機以上が製造された信頼性の高い機体である。現在でも飛行できるものがあるということが、その性能の高さを証明している。本来は輸送機であるが、ここで展示されている機体はルフトハンザドイツ航空の旅客機として活躍したもので、機内にも入れるようになっている。



ユンカース Ju52/3m

このほか、航空機部門ではライト兄弟の飛行機から第2次世界大戦で使用されたドイツ軍の戦闘機メッサーシュミット、さらには最新のジェット機、ヘリコプター、グライダーなどがフロアーだけでなく天井からも吊るされ、所狭しと展示されている。

また、ある地点とある地点を結ぶために英知が傾けられたトンネルや橋梁建設の技術についても分かりやすく理解できるような模型がいくつも展示されていた。

分館（交通センター館）を訪問

ドイツ博物館の収蔵品は巨大なものが多いため、展示や収蔵スペースの点でいろいろな制約を受けることから、本館以外に「シュライスハイム航空博物館」「交通センター館」「ボン分館」という3つの分館を併設している。私は本館を見学したあと、地下鉄で移動し、「交通センター館」にも足を運んだ。

「交通センター館」で展示の対象となっているのは自動車やオートバイ、鉄道といった陸上の乗り物である。展示館は大きく2つに分か

れ、第1展示館には初期のものから最先端のレーシングカーに至る自動車やオートバイなどが数多く展示されていた。



レーシングカーの展示

第2展示館では、展示スペースの大半をたくさん鉄道の車両が占めていた。なかでも目を引くのは、緑の車体に赤いスポーク動輪が精悍な印象を与える「バイエルン・エクスプレス」と呼ばれる1912年製の蒸気機関車である。この機関車はミュンヘン～ハンブルク間820kmを水の補給だけで走りぬく性能を持っていた。そしてこの横にはドイツ国鉄が誇るICE特急が展示され、鉄道車両における新旧の移り変わりを強調していた。



ICE特急と「バイエルン・エクスプレス」

人類が科学技術の分野で、これまでにどういうことを成し遂げてきたのか、ということを一堂のもとに結集させたのがドイツ博物館である。その点では、人類の英知と技術の殿堂であると言えよう。

しかし、子どもだけでなく、大人までもがこの博物館に惹きつけられるのは、どこかに置き忘れてきた少年・少女の心が呼び覚まされるからなのだろう。その意味から言うと、ドイツ博物館は、とてつもなく大きなおもちゃ箱なのかもしれない。

金属製品の保存処理

千葉 太朗

はじめに

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターには金属製品の保存処理を行なうための施設がある。そこで、当センターでは、鉄製品を中心に保存処理を行なってきた。今回は、当センターの施設を例に、金属製品の保存処理がどのように行なわれるのかを紹介したい。

保存処理とは

出土遺物や博物館に収蔵・展示されている金属製品を眼にしたことがあるだろう。これらの金属製品はいわゆる「サビ」に覆われ、また、サビを促進させる因子を内在しており、そのままにしているとサビが進行し、崩壊してしまう恐れもある。このような金属製品を未来へ伝え、広く活用するためには、それ以上錆びないような処置を取る必要がある。そのために行なわれるのが「保存処理」である。さらに、保存処理は、それに関わる自然科学的研究を通して、いにしえの技術や社会を明らかにする方法のひとつでもある。

保存処理の手順と方法

金属製品の保存処理のおもな工程は以下のようである。

- ① 処理前調査
- ② クリーニング
- ③ 脱塩
- ④ 樹脂含浸
- ⑤ コーティング
- ⑥ 接合・復元
- ⑦ 処理後調査

処理前調査では、まず写真撮影を行ない、肉眼による資料の観察、X線撮影（写真1）を行なう。肉眼観察により、資料の現状を把握し、資料に本来伴っていた有機質が付着していないかなどを確認する。そして、X線撮影は、資料の内部構造、本来の形状、ときには象嵌など、肉眼だけでは把握しきれない情報を得ることが



写真1 X線撮影装置

でき、保存処理には欠かせないものである。ここで得られた情報をもとに、処理の方針を決め、実際の作業に入っていく。

クリーニングでは、表面に付着した土や錆など unnecessary なものを除去する。道具はメスやニッパー、サンドブラスト、グラインダーなどを使用する。本来の形状、必要な情報が失われないように注意して作業しなければならない。

続いて、脱塩を行なう。脱塩が保存処理作業の中で、最も重要であるといっても過言ではない。脱塩とは、資料内部に潜む、サビを促進させる因子を除去することである。脱塩にもいろ



写真2 脱塩装置

いろいろな方法があるが、当センターでは、「高温高压脱酸素水法」を採用している。高温高压脱酸素水法とは、インヒビター（腐食防止剤）を添加した水溶液に資料を浸し、装置（写真2）内で高温高压をかけ、それを維持することで、水の粘度と表面張力が極度に低下し、脱酸素された熱水がサビの内部に浸入して可溶性の塩類を溶出させるという方法である（今津、肥塚1996）。インヒビターは、脱塩中に雰囲気気を減圧状態にしても、資料が内包する酸素があり、脱塩中にもサビが発生する恐れがあるため、それを防ぐために添加する。そして、インヒビターは脱塩終了後も資料に対して防錆効果を発揮することが知られている。この脱塩方法は、有機溶剤を使用しないので比較的安全に行なえ、脱塩に要する時間も短時間ですむという利点がある。また、高温水を使用するため、樹脂含浸を施した資料に対しても脱塩を行なえる。ただし、装置の規格のために脱塩を行なえる資料の形状、大きさ、数量が限られる、脱塩中の状況が観察できない、高温水を使用するので資料によっては適さないものがあるなどの問題点もある。

そして、資料を酸素や水分から守り、資料を強化することを目的として、樹脂含浸を行なう。樹脂含浸は、専用のタンク（写真3）に資料を入れ、減圧下で樹脂を含浸させる。含浸用樹脂には、フッ素アクリル樹脂を使用している。

その後、樹脂を資料表面に塗布する。これ



写真3 含浸装置

は、できる限り空気との接触をなくすために行なうのである。

そして、接合が必要な資料は、エポキシ系の接着剤を使用し、本来の形状に戻す。また、欠損部には必要に応じて、エポキシ樹脂にガラスマイクロバルーンを混合させたものを補填し、復元する。さらに、補填部分は周りと同色がない程度に補彩する。

保存処理作業が終了したら、手順や方法、使用した溶剤や樹脂、道具などを記録する。また、処理中に得られた知見なども記録しておく。処理前同様、処理後にも写真撮影を行なう。以上のようなことを記録資料として残し、今後新しい処理方法が開発されたり、経年変化により再処理が必要になったときなどに活用する。

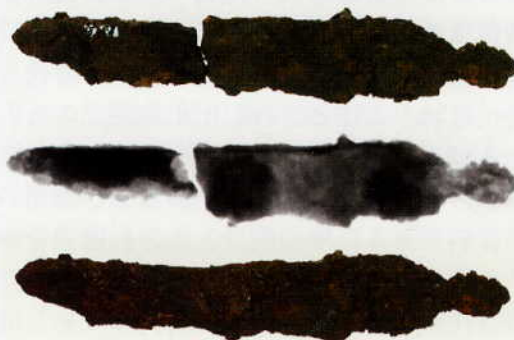


写真4 保存処理の一例
上：処理前 中：X線写真 下：処理後

おわりに

以上のような手順、方法で金属製品の保存処理は行なわれる。現在の保存処理の方法がすべてではなく、また、完全なものでもない。保存処理は文化財が広く活用されるため、文化財を永く伝えるため、そして、文化財が内在する情報を最大限に引き出すために行なわれる。そのためにも、よりよい材料、よりよい方法が、日々研究されている。関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターもその一端を担えれば幸いである。

【引用文献】

今津節生・肥塚隆保1996「金属遺物の脱塩処理—高温高压脱酸素水による脱塩効果の実例—」『保存科学研究集会 保存・修復をとりまく問題—出土金属—』奈良国立文化財研究所

本山彦一氏のアルバムとペルー共和国パラモンガ遺跡

山口 卓也 浅見 恵理

1. 本山彦一氏(1853～1932)は、福沢諭吉の門人として兵庫県の教育に携わり、明治後半から大正・昭和初期にかけて新聞界で活躍、大阪毎日新聞の社長を長く務める一方、考古学に深い関心をもった人物であり、精力的な調査を各地で行ったことでも有名である。末永雅雄先生(関西大学名誉教授)の手で、昭和10年にコレクションの目録「本山考古室要録」がまとめられている。

これには、石器時代(縄文・弥生)1297、古墳時代遺物その他370、参考(海外)98の1765資料が登録されている。このうち石器時代・古墳時代遺物その他とされた出土地明記のものには、本州・四国・九州、北海道、琉球・南西諸島から千島列島、台湾や朝鮮および満州の領域の資料がある。本山氏は、南洋統治領を除いて、まさに当時の日本の「勢力圏」を網羅して、石器時代から古墳時代相当の資料を収集している。参考資料(海外)には、エジプトやヨーロッパ、南北アメリカの考古資料、南洋諸島の民族資料が含まれている。本山氏は、地元の研究者に調査支援し、資料を入手したことも知られている。各地の石器時代資料を網羅・分類して、分類学的科学的に展示する意図があった証拠である。

関西大学博物館に本山彦一氏が写真を集めたアルバムがある。「考古A」という表題で、昭和2年から4年頃の新聞記事が貼られており、

記事に校正がなされたところがみられるので、同時期のアルバムであろう。ここに、日本各地の遺跡や遺物の写真とともに、南米ペルー、アンデス文明の遺跡と発掘の写真が貼られており、本山氏の資料収集活動の一端が窺えるので、紹介したい。

2. アルバムには、「ペルー遺跡 八葉 桑原忠夫氏(所)贈」として、ペルー、アンデス古代遺跡の写真がある。「パラモンガ城跡」五葉と「パルパ耕地付近旧邑の遺跡」「サンニコラス耕地付近発掘の風景」などである。今回は、このうちパラモンガ遺跡の画像5葉を紹介しよう。

パラモンガ遺跡(Paramonga)は、リマ県バランカ州パティビルカ(フォルタレッサ川下流域)の標高約30mの砂丘に位置する。チムー(A.D.1200～1400)帝国の最南端の辺境の要塞として知られる。

写真2は、遺跡の南西からの遠景である。小さく移動中の人物5名が見え、そのうちの一人が白い探検帽を被っている。写真3は、遺跡の4段築成の基壇の2段目の入口である。写真の中央に一名の男性が、山高帽とコートを手を持って立っている。あるいは桑原氏であろうか。写真4は、遺跡の北西からの遠景である。写真5は、遺跡の4段築成の基壇の3段目から基壇上部を撮影したものである。城壁上に7名の人影が遠望できる。写真6は、4段築成の基

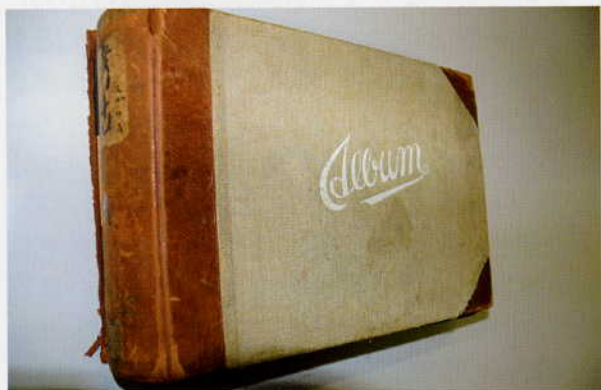


写真1 本山彦一氏のアルバム「考古A」



写真2 「ペルー共和国 パラモンガ遺跡(Paramonga) 南西からの遠景」

壇の2段目の入口と思われる部分である。日本人男性と思われる3名、左端にペルー人男性3人と右から2人目にペルー人女性が写る。7名の中央には、左胸部上に花飾りを付けコートを手持ちして山高帽を被った人物がおり、このグループの中心人物と見られる。右端の人物は探検帽を着用している。カメラマンを入れると、8名程度の日本・ペルー合同の踏査隊であることがわかる。

3. この写真は、桑原忠夫氏から本山彦一氏に寄贈されたもので、写真中に桑原氏を特定できないものの、桑原氏が現地在留邦人やペルー人とともに踏査を行なった記録であると考えられる。これを、本山彦一氏はアルバムに整理したのである。

本山資料中に、参考資料45～52まで8点が南米ペルーのものとして登録されており、現在関西大学博物館にチムーやチャンカイ、ワリなどの土器類として存在する。本山彦一氏が、生涯に南米で発掘した記録は認められていないので、これら土器も写真とともに、桑原氏から受け入れた可能性が考えられる。

今のところ、桑原忠夫氏の人物像については定かになっていないが、ペルーの情報をこの時期に入手していた本山彦一氏の、人脈の広さと蒐集へのどん欲さが窺われる一端であるといえよう。



写真3 「ペルー共和国 パラモンガ遺跡 (Paramonga)
4段築成基壇2段目入口」



写真4 「ペルー共和国 パラモンガ遺跡 (Paramonga)
北西遠景」



写真5 「ペルー共和国 パラモンガ遺跡 (Paramonga)
4段築成基壇3段目から基壇上部」



写真6 「ペルー共和国 パラモンガ遺跡 (Paramonga)
4段築成基壇2段目入口」

山口卓也：関西大学博物館学芸員
浅見恵理：総合研究大学院大学
博士課程在学

関西大学博物館の新たな取り組み

石立 弥生子

昨今の博物館・美術館を取り巻く環境は、大変厳しい。18歳人口の激減に伴う私立大学を取り巻く環境も、また大変厳しい。学校法人を経営母体とする関西大学博物館は、大学博物館としてのあるべき姿を追求するため、平成19(2007)年度、模索的にさまざまな事業に取り組んだ。試行錯誤の段階ではあるが、これからの大学博物館としてさらなる充実を目指すために紹介したい。

学生と母校との橋渡し～自校教育～

まずは、本館への見学者を増やすために始めた取り組みについて述べようと思う。

本館は重要文化財16点と重要美術品12点を含む700点あまりの資料を常設展示しており、大学博物館としては全国有数の規模を誇る。また、博物館相当施設としての歴史は平成6(1994)年からと浅いが、前身の考古学資料室の開設は、昭和31(1956)年であり、全国的にみても伝統のある施設である。従来から歴史を専攻する学生たちの利用は活発であり、考古学実習や博物館実習などの実物資料を使った講義に収蔵品を活用し、教育・研究施設としての役割も十分に果たしてきた。しかしながら、考古学資料に特化した施設であるため、文学部学生以外の自主的な見学は、数えるほどでしかなかった。

ところが、平成18(2006)年10月に本館が位置する施設「簡文館」の1階に、関西大学創立120周年を記念して、創設期の歴史や出身者の活躍を展示した「年史資料展示室」ができ、さらには、平成19(2007)年3月に「簡文館」が国の登録有形文化財(建造物)として登録されることが決まるなど、本館を含めてその周囲の環境が、関西大学における文化ゾーンとして、大学のアイデンティティを十分アピールできる存在となった。

簡文館は、最も古い部分が昭和3(1928)年の建築で、現在、大学に残る建物としては最も

古く、昭和60(1985)年までは大学図書館として多くの学生が利用していた施設である。卒業生が本館へ来館すると必ずといっていいほど、「ここでよく本を検索した」「懐かしい」といった思い出話に花がさく。階段の手すりや受付のカウンターまでを、なつかしく触れながら、同行者に学生時代の思い出を語り出す。

この簡文館のイメージと博物館・年史資料展示室の存在をうまくアピールすれば、卒業生だけでなく、在学生にも十分活用してもらえる施設となるのではないかと、さらには、全学生が在学中に1度は訪れ、来館者の増加要因として期待できるのではないかと期待を込めて、平成19(2007)年4月、全学部の先生方へ広報用チラシ「簡文館への招待～博物館と年史資料展示室～」を配布した。

特に新入生の導入教育として活用いただけるよう提案し、博物館と年史資料展示室の2室を解説付きで1講義時間内で見学できるコースを設定した。



企画展「小判とおかね」学生の見学風景

本館では、担当学芸員が、限られた時間を使って、国の重要文化財である玦状耳飾の発掘例を引用して、大学博物館の役割と、貴重な資料が本館に収蔵されることになった経緯や、高校までとは違う大学での勉強に対する姿勢などを、ユーモアを交えて、わかりやすく説明するよう心がけている。実物資料を目の前にして、過去に実際にあった話として持ち出すと、たい

ていの学生は、引き込まれるように聞いてくれる。インタープリテーションの妙である。

大学に入学したものの、目的を失い、無為に時間を過ごす学生が増えていることは周知のとおりである。なぜ「関西大学」に入学したのか、「関西大学」とはどんな大学であるのか、120年の伝統を持つ母校に対する愛校心を育むことは、すなわち学生生活の充実に直結する。昨今こういった観点から、自校教育に力を入れる大学が増えており、かくいう本学も平成20(2008)年度から「日本の歴史と関西大学」などの「関大科目群」を開設する。

当初は、いかに入館者数を増やそうかとの思いを多分に込めた見学案内ではあったが、本館のあらましを一例として学生に話すことで、十分母校との架け橋に成り得ることに自信を持った。

本館を訪れる校友の簡文館に寄せる愛校心の一端を目にするにつけ、たとえ当初は担当教員に半ば強制的に連れてこられた施設であったとしても、卒業後には、母校のイメージとして共有してもらえるようになるのではないかと、そんな淡い期待を抱いている。

平成19(2007)年度は、千里山キャンパスにあるほぼ全学部から39件1284名が来館するという成果に結びつけることができた。

彼らが卒業後に母校を訪れた際、昭和ののこのする博物館の思い出を何世代もの学生と共有してもらうために、年史資料展示室の協力を得ながら、今後も母校との橋渡しに取り組んでいこうと思う。

学生と地域との橋渡し～地域連携～

次に挙げるのは、地域との連携活動である。

この取り組みは、平成19(2007)年度文化庁芸術拠点形成事業として委託をうけた「北大阪ミュージアム・ネットワークの構築」事業の一環として行った。これは、北大阪地域にあるすべての博物館・美術館等48館が集まって「北大阪ミュージアム・ネットワーク(以下「KOMネット」)」を結成し、本館館長がその実行委員会の代表を務め、実施している事業である。「歴史をあるく」「ふるさとを知る」「自然と親しむ」の3つのテーマのもとに、市民一体型の行事を3本、そのほかに「ミュージアム・マップ」の刊行やホームページの作成、通信誌の発

行などを実施した。

KOMネットの代表として事務局を担当するにあたっては、正直、その煩雑さ、業務量の多さ等に逡巡することもあったが、この厳しい時代に、他館・園と連携して新しい事業を打ち立てる必要性・時代性に背中を押され臨んだ。

そこで、連携事業として、大学博物館の存在をアピールするために、何ができるかと考えたところ、やはり学生を軸とした地域連携が最も本館らしい取り組みになるのではないかと、との意見が出された。

実は、平成18年度博物館実習展にその先駆けとなる展示会をまとめたグループがあり、それをさらに発展できないか、と検討していた矢先であった。



北大阪ミュージアム・ネットワークのポスター

本館では、業務のひとつとして、毎年100名前後の学生が履修する本学文学部開設の「博物館実習」を受け入れている。そこでは、総数17名の専任および非常勤講師が、それぞれの専門に応じたカリキュラムを担当し、密度の濃いユニークな授業を展開している。一年を通して収蔵品を使った実習や、秋には本館第2展示室を使った「実習展」を開催するなど、本館を十二分に活用した授業となる。

本学で学芸員を志す学生は、必ず「博物館学課程」の集大成として学生自身が企画・展示すべてを担当する実習展を経験する。

実習展のテーマ選択も学生に任されており、毎年こういったものを選ぶかは楽しみなところであるが、平成18年度は、そのうちの一班が地

域に密着した題材をもとに展示を組み立て、博物館スタッフに衝撃を与えることになった。地域に埋もれている文化を学生の視点で掘り起こすことによって生まれた新鮮な衝撃であった。

KOMネットの取り組みを検討するにあたり、まず脳裏を横切ったのが、このことであり、ひいては、本学が立地する「吹田」を題材に学生と地域住民が共同で地域連携としての展示会「関西大学博物館展示会『吹田を知る』(会期：11月12日～11月17日)」を開催することになった。



博物館展示会「吹田を知る」会場風景

さて、学生が選んだテーマは、吹田の「建築」「歴史」「学校」「企業」「美術」「祭り」の6つで、それぞれが15名から20名程度からなる班を結成して作業をすすめた。

例年と違って「吹田」「住民参加(地域連携)」という条件をつけたことから、当初は戸惑う学生も多かったが、各班それぞれが地元の郷土史家や一般の方々と連携して、予想以上に地域と密着した展示会を作り上げることができた。準備段階から大学周辺の住民や自治会、企業などへ足を運び、きめ細かな交流を重ねていった結果である。展示会当日は、協力頂いた多くの地域の方々にご覧いただくことができ、6日間の会期中に1190名もの来場者があった。

広報手段や実行方法については、まだまだ改良の余地を残しているが、自館の活動と平行して地域と結びつくことで、まったく違う可能性が開けてくることに気づかされた。特に、学生が中心となって展示会を開催することで、KOMネット連携館の協力や地域の方々との交流の支えが予想以上の広がりをもち、非常にユニークな展示会を開催することができた。学生を中心に、地域(住民)－大学(学生・本館)－博物

館(地域施設・博物館)と双方向の連携が可能になった。これまで希薄だった地域館・園と連携することで得られたものは大きかった。

「博物館実習」は、通常の講義科目と異なり、資料や教材の頻繁な受け渡し、学外見学の同行など、博物館実習生と博物館スタッフが接する機会が多く、このような地域連携事業を実施するにしても、様々な視点で博物館スタッフが運営を支えることができた点も成功の一因となったと思われる。学生と地域の間に立って、本館が緩衝材の役割を果たすこともあり、より多くの方に参加いただける展示会を作り上げることができた。

展示会準備期間中は、それこそ学生たちは寝る間も惜しんで活動した。また、展示上の問題だけでなく、グループ間の人間関係などあらゆる問題も彼らにはのしかかってくる。これは、今年度に限ってのことではないが、それらすべてを乗り越えて展示会を終えた学生たちの顔は一樣に晴れ晴れとしていた。

今年度は、対外的な評価も加味され、展示会終了後もその余波を長く感じる事ができた。展示会のパンフレットの残部を神社に配架したいとのお申し出や、学生が渾身こめて作成した図録を地域図書館で所蔵したいとのお申し出などを、本館で取り次ぐたびに、学生たちの成果を評価されることの喜びを感じることができた。

本館で、学生と地域との橋渡しをすることは、全てにおいて良い経験となった。

学生と未来への橋渡し～学芸員インターンシップ～

最後にあげる取り組みは、学生の未来への橋渡しに関するものである。

前述のとおり本館では毎年100名前後の「博物館実習」履修生を受け入れ、学芸員養成に力を入れている。しかしながら、全国的には、学芸員資格取得者が毎年1万人を越えて輩出される一方で、学芸員として採用されるのは100人程度である。こういった問題もあわせて、博物館法改正と連動した学芸員資格の充実と改変の動きが具体化する様相を見せており、今後の動きに関心が寄せられている。本学でも、その対応の検討に入っているが、博物館として何かできないかと始めたのが、「学芸員インターンシップ」である。

本学のキャリアサポートは、情報誌等の統計でも常に上位に位置するほど定評があり、下位年次のキャリア教育にはじまって、卒業後の就職サポートまできめ細かに取り組んでいる。インターンシップについても、派遣する実習生の選考から単位認定にいたるまでのルールが確立しており、キャリアセンターのサポートのもとに、博物館業務の一つとして取り入れることに何の不安もなかった。

「学芸員インターンシップ」は、派遣者を「博物館実習」履修中または修得済みの「学芸員」志望者に限定し、派遣先についても、学芸員採用のある博物館・美術館などとした。そして、5月に募集を開始し、6月に説明会を行ったところ、大学院生・学部生合わせて30名を超える参加があった。



学芸員から指導を受けるインターンシップ生

学芸員の採用試験において、専門知識の量もさることながら、館務経験の有無を問われることがある。この変動の時代において、実践力は経験値に比例する。インターンシップで、短期間とはいえ、館の内情を垣間見させてもらったり、様々な館務を経験させてもらったりと、専門以外の知識についての見聞も深めることができれば、必ずや将来への布石となるであろう。

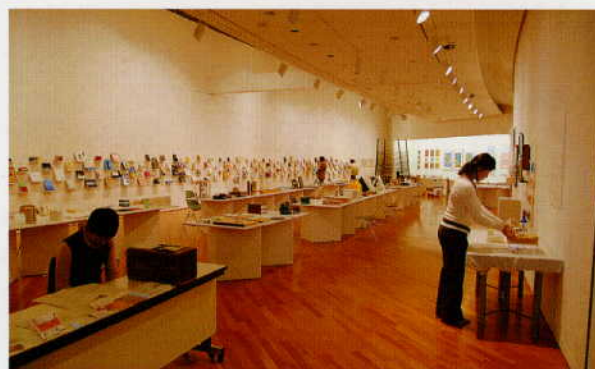
大学としての意向と、学生の思惑が合致したのか、予想以上の参加者であった。

その後、エントリーシートの提出・面談を経て、10月からの派遣に備えた。

インターンシップの受け入れについては、近隣の3施設から協力を得ることができ、そのうち2館は大学院レベルの実習生受け入れの申し出をいただいた。うち1館は専門に見合う学生の都合があわず派遣を見合わすことになったが、実際に派遣に結びついた院生は、指導学芸員の

指示のもとに、解説パネルの掲示や展示写真の選択など、企画展準備を実地に体験させてもらうことができ、良い経験を積んだものと思う。

学部生を含め、14名のインターンシップ生を受け入れてくれた芦屋市立美術博物館では、主に展示室の看視業務を実習し、来館者との対応の機微を学んだ。来館者からの質問は展示作品についてはもとより、館の構成や過去の展示会、近隣の情報等、多岐にわたることもあり、対応の難しさに社会人としての自覚を促されたと報告する学生もいた。また、団体見学者に対応する学芸員の業務の範疇の広さに驚いたものもあり、インターンシップ教育の必要性を改めて感じさせられた。



インターンシップ実習風景

むすび

大学における3つの柱として「教育」「研究」「社会貢献」がある。本館でも大学内の活動に終始することなく、地域の一員としての社会貢献活動に積極的に取り組んでいる。その一つに毎夏に開催している「なんでも相談会」がある。ここ数年、博物館を舞台に体験型の行事として行っているが、近隣の市民の方々や小学生の参加が大変多く、その対応には博物館スタッフ同様、学生が重要な役割を担ってくれている。

平成19(2007)年度は、本館にとってこれまでになく駆け足で走り抜けた一年であった。旧習に囚われることなく、また失敗を恐れずに新しい取り組みに挑戦した。

大学博物館としてできることは、と自問すると必ず「学生」なしでは成り立たないと即答する自分がいる。当たり前のことではあるが、学生を軸にしたこの3つの取り組みを始めることで、今後の大学博物館としてのあり方が見えてくるような気がしている。

■ 博物館だより

◇平成19年度関西大学博物館 開館日数・入館者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
開館日数	19	24	20	23	6	6	23	24	16	18	14	18	211
入館者数	1,680	2,701	394	857	833	81	430	1,883	171	85	203	1,020	10,388

◇11月12日(月)から17日(土)まで、関西大学博物館展示会「吹田を知る」を本館第2展示室で開催しました。文化庁からの委託をうけた北大阪ミュージアム・ネットワーク実行委員会として、従来の博物館実習展を拡大し実施したものです。吹田地域の皆さんと学生が共同でさまざまな視点から“吹田・千里山”を検証し、6つのテーマで展示しました。期間中1,119人の来館者がありました。

◇なにわ・大阪文化遺産学研究センターが主催して11月24日(土)から12月1日(土)まで、「なにわ・大阪の文化力ー大阪文化遺産学の源流と系譜を辿るー」を第2展示室で開催しました。本山コレクションの金石文拓本をはじめ津田秀夫氏の収集文書や牧村史陽氏の旧蔵写真などを展示し、期間中278人の見学者がありました。

◇平成18年度から主だった博物館収蔵品の3D撮影を行っています。関西大学学術リポジトリや、関西大学博物館バーチャルミュージアムで、撮影の終わった約100点の3D画像をご覧いただくことができます。また、このデジタル化に伴い、撮影を委託したマルカエンジニアリング(株)企画事業部部長 齊藤博史氏とコクヨ(株)RDIセンター デジタルミュージアム推進グループ 八木 武氏による「博物館と情報化」と題した講演会を12月8日(土)に実施し、28名が聴講しました。



◇3月11日(火)に高松塚古墳壁画再現展示室が竣工し、3月18日(火)から一般公開を始めました。高松塚古墳壁画の発見は、昭和47年3月、末永雅雄関西大学名誉教授(昭和63年文化勲章受賞者)の指導のもと、網干善教助教授(当時、関西大学名誉教授)が関西大学の学生を率いて行いました。「世紀の大発見」といわれる高松塚古墳壁画検出直後の撮影写真をもとに、極彩色の四神図や男子群像、女子群像、太陽や月、天文図などを原寸大の精緻な美術陶板に焼き付け、石室内の様子を再現しました。

◇博物館では平成20年4月1日(火)から5月18日(日)まで、「天目 宙への誘い～木村盛康陶芸展～」を開催します。現代陶芸界で天目の第一人者と目される陶芸家 木村盛康氏から寄贈いただいた作品を中心に展示会を開催します。

・ ・ ・ 編集後記 ・ ・ ・

『阡陵』第56号をお届けいたします。今号は米田先生から玉稿をいただきました。さらに、本学学術センター次長 熊と、なにわ大阪文化遺産学研究センター研究員の千葉が報告をあげております。ご執筆賜りました皆様に感謝申し上げます。

表紙は古代エジプトのオシリス神小青銅像Figurine of the Egyptian Godです。オシリスは、特に民間において最も広く崇拝された神で、冥界の支配者であり、穀物の神・ナイルの神です。